第65号　50円
昭和55年1月25日

内　容

1980年代の大学セミナー・ハウス 1
新春寸言……2〜3
法人ニュース……3
第1回国際プログラム委員会……4
第2・3回共同セミナー委員会……4
第104回大学共同セミナー……5
第105回大学共同セミナー……6
千人会……8
寄付金報告・寄贈図書……9
館長日記から……11

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人　大学セミナー・ハウス
＜所在地＞
東京都八王子市下柚木
（〒192-03）
電話　0426-76-8511〜3
振替口座　東京　74590番
編　集
大学セミナー・ハウス
企画室

一九八〇年代の大学セミナー・ハウス

創造的発展を期待する

上智大学教授
鶴見　和子

今年一九八〇年に、大学セミナー・ハウスは開館十五周年を記念し、創立者の飯田宗一郎館長は七〇歳の誕生日を迎えられる。セミナー・ハウスにとって、世界的な節目と、社会的な節目と、そして個人的な節目とが重なりあう大切な年である。わたしはまず、セミナー・ハウスと飯田館長に、心からおよろこびを申上げたい。そして、この三つの節が結節することのいみを考えたい。

共同セミナーであったか、国際学生セミナーであったかおぼえていないが、山田慶児さん（京都大学人文科学研究所）が講演されたことを記憶している。近代科学・技術は、西欧の場において、アラビア、ペルシャ、中国等の古代文明が、ギリシャ・ローマの古代文明と、中世ヨーロッパの伝統とに合流し、統合されることによって成立したのだといわれた。この話が、セミナー・ハウスでおこなわれたことは、今考えてみると、予言的であった。西欧近代文明が、人類にとって唯一普遍の手本であるという神話が崩れゆきつつ、一九七〇年代は幕をおろした。そして、かつて西欧の場でおこなわれた諸文明の合流と対決と再統合とを、西欧とは異なる伝統をもつさまざまの地域、アジア、ラテン・アメリカ、アラブ、アフリカ諸国でこころみようという動きが、さかんになるのが一九八〇年代の幕あけである。この時に、大学セミナー・ハウスは、日本の中で、もっともふさわしい創造の場となることができるだろう。そうであってほしい。

セミナー・ハウスには、これまでの実績がある。ここでは、学際的、大学際的、そして国際的に、異なる考えや想いをもつ人々が、自由に、そしてゆっくりと時間を気にしないで、美しい自然の中で、論じあったり、歩いたり、笑ったり、そして時にはひとりでしずかにしたり、することができるからである。学生といっしょの合宿ゼミでも、また他大学の異なる領域の研究者や外国人をまじえた合宿研究会でも、議論が白熱し、互いにキューをとりあい、新しい考えがひらめき、そして新しい考えを共有するに至った経験は、セミナー・ハウスの自由で、濶達な雰囲気のたまものである。

1月には、クリスチャンの飯田館長の古希を祝って、仏教についての座談会が催されるというのもおもしろいし、3月には「イスラムの世界」を主題とする共同セミナーが開かれるというのも適切である。おもいっきり、異なる信仰、考え、感じをぶっつけあい、対立点をはっきりさせ、しかも相互にどこで結びあえるかを探求する態度を、セミナー・ハウスの内部にも、わたしたち受益者のあいだにも、しっかり保ちつづけてゆきたい。そうすることによって、わたしたちは、ここを創造の拠点としつづけることができるだろう。

「自発的な参加者」として役割を問う

東京大学助教授
村上陽一郎

大学セミナー・ハウスは今年で開館十五周年を迎える。人間ならば、青春期にさしかかったところだ。

セミナー・ハウスが、館長の掲げる理想の灯に導かれて辿ってきたこの十五年間を顧みるとき、大学に関わる人間の一人として、忸怩たる感を抱かされる。というのも、大学がそれ本来の役割を果たしていたとしたら、セミナー・ハウスがこれほどの「成果」を挙げるはずもなかったと考えるからである。

もちろん同世代の四〇％近くが大学に進学する今日、現実に大学が、学問を媒介とした統一体であると同時にモラルを共有する運命共同体として存立することは、率直にいって不可能である。その意味で、セミナー・ハウスが、真の大学が目指すべき姿のある部分を、つねに先取りして実現してきたことは、どのような言葉を以ってしても言い尽せない見事な「成果」であった。

つまり、セミナー・ハウスがその少年期においてさえ残してきた足跡は、そのまま、われわれ大学人の一人一人に、無言で反省を迫っている。

もっとも、人間個人でも、十五歳の少年少女は、ほぼ成育した体格のうちにさまざまな不均衡を抱え、理想と現実の乖離に、苦悩と動揺を隠せない時期でもある。まして組織は、掲げられた指導理念に向っての一体感という凝集力に支えられている発育期はともかく、運営が恒常化し、維持管理の時期に入る場合、凝集力は稀薄になる。組織の維持自体が目的化する上に、拡大した組織のなかには、必然的に、当初の凝集力とは異なった複数の価値意識を内包することになり、しかも、その整備が必要になるからである。

今日のセミナー・ハウスにも、そうしたある種の不均衡がないとはいえないし、生意気な言草だが、私のようなものでもそれは推察できる。長い間一利用者としてお世話になってきたものとして、改めて組織の叡智を結集して、セミナー・ハウス青年期の歴史の創出に進んで戴きたいという想い切である。

しかし考えてみると、こんな風に、「利用者」として「外から」ものをいうこと自体がセミナー・ハウスの理念に悖るものなのだ。セミナー・ハウスの利用者は、単なる施設の利用者なのではなく、かつて十三世紀、ボローニア、パリ、オクスフォードやケンブリッジに生まれた大学がそうであったように、関わり合うすべての人間が、組織に対して責任の一端を担い、最も根源的な意味での「自発的な参加者」として、組織に一時的にせよ我が身を托している存在

（次ページ5段目へつづく）

新春寸言

80年代の大学セミナー・ハウスに期待する

――後援者、法人評議員、千人会員利用者、セミナー委員、OB社会人など関わりの深い方々のご意見をきいた。内と外との間に意見を交換する回線路をしくことによって、組織と仕事の総点検ができるからである――

板垣與一
（一橋大学名誉教授）

一九七九年は大学セミナー・ハウスにとっても激動の一年でした。こんどの組織・運営体制の変革によって、その後の丘のクライメートに、どのような新しい変化のきざしがあらわれたのか、私の最も知りたいところです。

大学セミナー・ハウスは、その本質と使命からみて一つのユニークな教育機関です。そこでは、月並な意味での個々の知識や物事を、「より多く」教えたり、「より多く」学んだりするところではありません。それよりももっと大事なことは、ものの見方や考え方を、自ら学び自ら体得することです。自分が自分自身にたいして持ちつづけてきた固定的なイメージを打破し、本来の自己自身に立ち還り、自己を創造的に革新する機会をつかむ「自己発見」「自己啓発」の場こそ、ほかならぬ大学セミナー・ハウスなのです。

先生も学生も渾然一体となり、互いに活発な意見をたたかわせ、ともに問題解決への道を探求する切磋琢磨の道場なのです。この意味でセミナー・ハウスは生きた生命体です。そこでは魂と魂とのはげしいぶつかりあいと、そこから目覚めゆく若き魂のこだまがきこえてくる人生の道場なのです。そして、ここにこそセミナー・ハウスのユニークさがあるのです。

組織化も制度化も、それ自体としては結構です。しかし、もし「仏作って魂入れず」の弊に堕するようなことになれば、躍動する生命の泉は涸れ、やがて存在の意義さえ問われることになりましょう。組織が存在したからといって、それで組織に価値があるのではありません。魂をもった組織からのみ、はじめて価値が生まれてくるのです。八〇年代の関頭に立ついまこそ、丘を揺がし、森にこだまする「偉大な魂」の創造的活動を、心から期待しかつ祈念しています。

中島正樹
（三菱総合研究所社長）

時折、中央高速道路を車で馳ることがあり、八王子辺を抜けるとき、いつも不思議に私の心に何か明るい、しかも暖い情景が胸にせまって来る。それは大学セミナー・ハウスの風景である。

大学紛争で、学園が荒れている時、館長の飯田さんの御招請に応じてはじめて参上してから、もう十年以上も経ってしまった。当時教育問題にいささかかわりがあった私は、せい一杯その問題に取り組んでいたことがあり、日本民族の将来に思いを馳せて、このままではならないという、せっぱつまった思いをし、経済同友会の教育問題委員長として提言をし、可成り反響があった様だ。しかし私の提言の中には残念ながら、セミナー・ハウスに直接言及しなかったのは申し訳なかった。しかし大学の閉鎖性に対するきびしい批判をした積りであったが、その後の大学は紛争は一応静まったが、制度としての大学の型はなかなか前進がないように思われるのは私の誤解なのだろうか。

そうした従来の固まった制度や運営の殻を破って、封鎖されない教育の実演がセミナー・ハウスに実現されていることは、大きな救いである。交友館（キリンサロン）の建設にいささか口ききだけの役目を果たしたにすぎなかったが、今でも私の生涯のうちの一つの小さな善であったかと思っている。

セミナー・ハウスがこれからも――古い言葉だが――「弥栄」であって欲しい。

小池生夫
（慶応義塾大学教授）

年末に再びセミナー・ハウスを利用させていただいた。小さな国際セミナーを学生とやるためである。夏のむせかえる草いきれとちがって、石を打ってもひびくかと思われる閑静の中に、張りつめる冷気があった。知的創造の場がそこにはあると再認識した。私たち大学英語教育学会（JACET）の寄贈した樹木は、過去一四年間に、そこかしこと点在し、その前にたたずめば、思い出が、波打ち寄せる。思えば、私たちもセミナー・ハウスとともに発展してきたのであった。そして、今、歴史の一つの節目を迎えている。セミナー・ハウスも同じであろうと思った。その意味では、昨年の多難さは象徴的であった。

一九八〇年代を迎え、今後十年間に、大学セミナー・ハウスは発展を続けるか、衰退するか、予断を許さない。飯田館長をはじめとする創成期の人々の偉大な情熱が、精神の強靱さが、大きな愛が、第二期の人々へ、果たして受けつがれるだろうか。いや、受けつがれなければならない。セミナー・ハウスでの営みは、日本の大学教育の創造運動の起爆剤となってきた。

それは、壮大な実験であって、その成否は、日本の教育に影響を与える。学生と教員、研究者同士が垣根を越えて、直接人間同士の触れ合いの「場」を持つことは、今日でもけっして多くはない。そして、その「場」は、必要欠くべからざるものである。その意味で、セミナー・ハウスの存在価値は、決して減じることはない。では、必然的に発展するか。そうともいわれない。人間次第である。それを運営していく人間集団に魅力がなければならない。その意味で、内側にあって動かす人々に将来を見通し、過去よりも将来を見据えて協力してもらいたい。外側の私たちもこのセミナー・ハウスという一つの大きな知的社会運動を支えよう。

三戸公
（立教大学教授）

今さら何を期待しよう。これまで十分満足してきた。瑣末な要望はないわけではない。だが、そんなこと書いたって意味はない。

（1ページよりつづく）

であるべきなのだ。それゆえ、われわれ利用者も、セミナー・ハウスという組織からどんなサーヴィスを期待するか、というのではなく、自分はセミナー・ハウスにどのようなサーヴィスをなし得るか、という観点を忘れないでいたいと思う。

そうであって初めて、通常の意味での「組織」としての大学セミナー・ハウスが、成熟期を迎えて、維持管理の体制が整備されてなお、その「組織」は、単なる「官僚制度」以上のものとして機能し続けるのではあるまいか。

一人の男が夢を抱く。大学の真髄はセミナーにある。それは交流共同が望ましい。この基本的なことを実現するための施設は未だ無い。それをつくろう。その夢は、その人にいつごろ芽生え、どのようにふくらんでいったかは知らぬ。その夢は人をとらえ、人を動かす。智ある人は智を、財ある人は財を、喜んで出す。そして、その人の等身大に、夢は現実となり、理想は結晶し、八王子野猿峠の広大な起伏と眺望が、虚飾を捨てながらも必要な機能を贅沢なまでに追求した独特の形状をもった建築群と融合する。

夢や理想の実現は、今の世ではごく少数の人が企業化してなしとげ、あるいは組織にからめとられて現実となる。教育とて、その例外ではない。だが、この人は、その夢を、理想そのものの自律体として現実のものとした。

エリートとは、このような人のことをいうのであろう。このセミ

ナー・ハウスに訪れる人は皆、この人に招かれ、この人に選ばれたエリートである。われわれは、この人のエリートたることを自覚して学ばねばならない。

横田洋三（国際基督教大学教授）

大学セミナー・ハウスは、これまで、日本の大学の問題点のひとつであった大学間の壁を取り除き、また、教師と学生の間の学問的、人格的交わりの場として、大きな役割を果たしてきました。その後、大学の側でも色々な試みや改革を通じて閉鎖性を打破するような努力をしはじめましたが、なお、理想にはほど遠い状況にあります。したがって、これまでセミナー・ハウスが行ってきた事業は、八〇年代に入っても継続、発展させていってもらいたいと思います。

また、最近、セミナー・ハウスは、第二の方向性として国際プログラムに力を入れるようになりました。これも、日本と世界の結びつきがいっそう強まっていく八〇年代において、非常に大切な側面ですので、ぜひ強化、充実を望みたいと思います。

さらに、今後は、新しい第三の方向性として、大学と社会とのつながりを緊密にするようなプログラムを企画し、実行していってもらいたいと思います。その場合、対象とする社会人には、一流会社や官庁で働く人だけでなく、工場労働者、一般勤労者、商業従事者、自由業の従事者、農民、家庭の主婦など、広く社会に働く人すべてを包むように考える必要があります。また、このプログラムにおいては、社会人だけを特別のグループとして扱うのでなく、社会人と大学生とが一緒に参加できるような工夫をこらすべきだと思います。

藤本紘（日本長期信用銀行）

セミナー・ハウスが開館十五周年を迎えるとのこと、大学三年だった私が開館記念セミナーに参加してから随分年月がたったものと思う。

さてこの間のセミナー・ハウスの歴史を「大学間」「学問間」の垣根を越える試みであったとするならば、八〇年代に試みられるべきことは「世代間」の垣根を越えた、地域全体の学問の場となることであろう。

具体的には第一に学生という世代のほか、社会人の各層を対象にその問題意識に合ったテーマでのセミナーを行うこと、第二に全世代が一緒に討論できるような「地域」の問題を取り上げることである。

世に生涯教育が喧伝され、各地でカルチャーセンターが繁盛しているが、本当に必要なのは横文字のカルチャーでなく、各世代の積み上げた経験と新しい学問が融合した〝真理への情熱〟ではないだろうか、セミナー・ハウスならばこうした期待に応えることが出来ると思う。

さてセミナー・ハウスの事業内容が社会全体の学問の場に変化するならば運営企画面も手が加えられることだろう。即ち評議会、理事会に大学人・財界人と共に社会人（セミナー・ハウス卒業生や地元八王子市民）の参加を求め新しいヴィジョンを創り出す時期に入ったのではないだろうか。

法人ニュース

▲寄付行為改正小委員会発足
来る三月に答申

寄付行為改正小委員会は、昭和54年5月28日の第40回理事会で設置が決定され、現行寄付行為の改正の要否を検討する目的で去る7月に設置、加藤一郎東大法学部教授を委員長に、川原栄峰早大文学部教授、下森定法政大法学部教授を委員に委嘱、7月12日以降、12月13日まで六回の会合を開き、飯田館長、岡山専務理事はじめ関係者から事情ならびに意見を聴取してきた。

開館以来十五年の間に大学セミナー・ハウスをとりまく内外の状況に変化があり、将来への発展を考え、内部体制を整備するためにも、この際改めるべきところは改めたらどうかというのが当小委員会設置の主旨である。来る3月までには関連の諸規程類も一応検討の上、小委員会としての最終的結論を理事長あて上申する予定である。

▲第12回協力会員校事務連絡会
会員校との連帯を深めるために
昭和54年10月31日

新たに協力会員校として加入された筑波大学、千葉大学、文教大学、相模女子大学の歓迎の意味をこめて、昭和54年度の協力会員校事務連絡会が去る54年10月31日、当ハウスで開催された。

当法人が会員校との連帯を深め、その運営に一層の円滑化をはかるとともに、会員校の事務担当者相互の親睦をめざして毎年一回開催の連絡会も53年度を休んだため、今回二年ぶりに第一二回を迎えた。

当日は11時に開会、つづいて一時間にわたり二組に分かれて構内の施設見学が行われた。食堂での歓迎昼食会のあと、13時より協議会に入り、まず二六校三四名の出席者による自己紹介、ついで新会員校加入の歓迎と紹介、座長として法政大学・岸伸年、副座長として東京薬科大学・佐々木孝の両氏が選出された。

最初に挨拶に立たれた茅誠司理事長から当大学セミナー・ハウス設立の由来が語られ、かつて飢えと渇きの時代に学問探求に没頭した若き時代の回想もまじえ、物質的豊富の中の現代の大学生活で得られぬものを各大学共同の力で作り出そうという初心の高さ、正しさを説かれての談話は聴衆に深い共鳴をよんだ。

飯田館長からも当法人のもつ公共性を強調、大学連合の理念から単に自校のゼミ学生の利用状況だけから物事を考えず、ここを利用する学生一般にできるだけ安い経費で泊り研修できるよう、国にも補助の強化を働きかけるなど、法人との親戚づきあい、仲間意識を持ち帰っていただきたい旨の挨拶がなされた。

ついで専務理事、事業部長、企画室主事からこの二年間の事業報告がなされたあと、座長の司会で出席者との間に活発な質疑応答が交わされ、17時には交友館での交歓会に移り、18時解散した。

当ハウスに初めての訪問者も多かったが、百聞は一見に如かずと、今後の利用促進が約束され、また学内でのPR方法、利用者への経費補助方法などをめぐり、具体的な意見交換が定刻をすぎてもなお続行するという盛況であった。

協議会の司会をつとめて

岸伸年（法政大学庶務課長）

大学セミナー・ハウス訪問の機会をはじめて得た途端、会の司会をおおせつかり困惑しました。皆様のご協力で終始、熱心かつ和やかなお話合いを無事進めえたことは幸いでした。会員校それぞれが自分たち共有の、かけがえのない施設として本当に活用すべき時代が今こそ来つつあることを実感したように思います。実際的な面でいろいろ注文もありますけれども、それを充たして余りあるセミナー・ハウス独自の高く豊かな精神の健在を認識し合って散会できたことがこの日の最高の収穫でした。（談）

▲協力会員校事務連絡会出席者名
（国公私別・入会順）

▼東京大学教養学部学生課　千明賢治　同　森暉志▼東京工業大学教務課長　青山幸雄　同課　大沢栄▼東京学芸大学教育学部学務係長　木住野守▼お茶の水女子大学学生課長　樋沼宗吉▼東京外国語大学学生部教務課係長　和田博▼筑波大学学生部研修施設係長　金野龍一▼千葉大学学生部教務係長　斎藤清　同部総務主任　鴇田哲雄▼東京都立大学学生部学生課　中村匠▼日本女子大学学務部大学教務課長　北山恵美▼慶応義塾大学学生部学生課長　宮部美充▼法政大学総務部庶務課長　岸伸年　学

（次ページ5段目へつづく）

◆昭和54年度

第1回国際プログラム委員会
新陣容で発足

昭和54年11月21日／17時半～20時半／於・私学会館

【出席者】中嶋嶺雄、広野良吉、三輪公忠、横田洋三、山代昌希、阿部美哉、小倉充夫、岡野行秀、光田明正（敬称略）

◇

まずはじめに、飯田館長より開会の挨拶が行われ、議事に入った。委員の任期はすでに6月末で満了のところ、事情で今日まで延びていたが、前委員長川田侃上智大教授、前副委員長中嶋嶺雄東京外語大教授、広野良吉成蹊大教授の意見を参照して、再任ならびに新任をお願いする先生方を選び、これらの方々からの承認も得られたので、今回の委員会の開催に至ったことが館長より述べられ、当委員会内規にもとづき、中嶋嶺雄氏に委員長をお願いしたいとの提案がなされ、全員一致で中嶋氏が選出された。

次に、中嶋委員長は、副委員長に広野良吉、三輪公忠両氏を指名され、両氏の了承の上、一同の賛成を得て承認された。

つづいて、当面の課題である第7回国際学生セミナーの企画についての協議に移った。前年度委員会が討議の上、新年度のセミナーの副題として申し送られた「日本と朝鮮半島との文化接触」について意見を交換した結果、現下の政治状況ではプログラムの実現はかなり困難ではないかとの慎重意見が強く、別の機会にゆずることになった。しかし「文化接触と日本」を主題に今後開催が予定されている二回のセミナーでは、従来の総合的テーマよりむしろ特定の地域を対象にした研究を主眼にすべきであろうとの前年度委員会の提案を受けつぎ、今年度はアジア・大平洋地域を取り上げ、副題を「相互依存のなかで」と決定し、運営には中嶋、三輪、小倉、岡野、山代の諸氏が当たることになった。なお、次年度では欧米を取り上げることになった。

【国際プログラム委員】
（就任順、50音順、○印は新任）

＞委員長＜
中嶋　嶺雄　東京外国語大教授
＜副委員長＞
広野　良吉　成蹊大教授
三輪　公忠　上智大教授
＜委員＞
阿部　美哉　日本学術振興会人事交流課長
金山　宣夫　東和大教授
鈴木　孝夫　慶応義塾大教授
平野健一郎　東京大助教授
山代　昌希　早稲田大外事課長
横田　洋三　国際基督教大教授
岡野　行秀　東京大教授
小倉　充夫　津田塾大助教授
菊地　靖　早稲田大教授
熊田　禎宣　東京工業大教授
小宮山　猛　国際交流基金受入課長
光田　明正　文部省留学生課長

◆昭和54年度

第2・第3回共同セミナー委員会

▼**第2回　昭和54年11月5日　18時～20時半／於・私学会館**

【出席者】岡宏子、野田春彦、山岸健、黒田道雄、友部直、板垣雄三、熊坂敦子、小池滋、高須裕三、阿久津喜弘、馬場伸也（敬称略）

◇

はじめに、第104回の実施報告及び第105～108回の準備経過報告が、それぞれ担当の運営委員と企画室より行われ、つづいて今回の主要な議事である次年度の年間計画についての討議に入った。飯田館長より以下の方針が説明され、了承された。

①大学共同セミナーは一五年に亘り所期の役割を一応果たしたといってよく、今後は回数にとらわれることなく、内容を綿密に吟味し、高めていきたい。従来の規模の共同セミナーは年間5回をメドにしたい。

②大学院共同セミナーは二回連続の形を当分つづけ、特色ある内容に育てたい。

③共同セミナーから派生した八大学合同セミナーのように、有志教授による専攻学科が同じ数大学の合同セミナーを国公私の大学社会の中に積極的に育てたい。

次に、次年度上半期の共同セミナーの企画をめぐって、種々の意見交換がなされ、第109回は前回の委員会で取上げられ懸案となっていた「エネルギー問題」を具体化すること、第110回は学生から要望の強い芸術セミナーとすること、に決定した。なお、来年は当セミナー・ハウスが開館十五周年を迎えるので、十分時間をかけて記念セミナーにふさわしい企画を練ることが確認された。

引きつづいて、現行の「共同セミナー委員会内規」を実際の運用に照らし、同時に、「国際プログラム委員会内規」（52年7月施行）にも歩調を合わせ次のように修正したい旨の提案理由が岡山専務理事からなされ、承認された。

第四条2「委員長は前期正副委員長と協議の上、館長が委嘱する。その任期は二年とする。ただし再任を妨げない。」

第五条「委員会は副委員長二名をおく。その任期は二年とする。ただし再任を妨げない。」

最後に、今年度になって顕著になった共同セミナーの参加人員の減少について、その原因の分析と対策の必要性が企画室より提言され、種々の意見交換が行われたが、その主なものは大要次のようである。

①学生の意識や気質が変わっているが、その捉え方が十分か。

②テーマの選定に問題はないか。

③学内PR方法の再検討の必要。

④学生とのジェネレーション・ギャップを埋めるため、若い世代の委員の参加が望ましい。

▼**第3回　昭和54年11月28日　18時～20時半／於・私学会館**

【出席者】岡宏子、野田春彦、黒田道雄、佐竹寛、阿久津嘉弘、友部直（敬称略）

◇

今回は、次年度に当セミナー・ハウスが迎える開館十五周年を記念する共同セミナーの企画につき、委員会の承認を求めるために急きょ開催されたものである。

野田副委員長より、前回の委員会の決定に基づきエネルギー問題をテーマにした第109回共同セミナー（会期＝昭和55年5月30日～6月1日）の企画を進めていたが、幸いにも横浜国立大教授太田時男氏のご協力を仰ぐことができ、具体化の見通しがついた。エネルギー問題は八〇年代に人類が直面する最大の課題であり、極めて時宜にかなったテーマであるので、これを開館十五周年記念の一つとして実施してはどうか、との提案がなされ、全員の賛成を得て承認された。併せて、セミナー終了日の翌日に、都内の会場で記念大講演会を計画したいとの館長提案があ

（次ページ5段目へつづく）

（3ページよりつづく）

生部厚生課長　平井敏夫▼立教大学学生部学生厚生課　川上吉彦▼武蔵工業大学教務部学生課長　小檜山勇雄　同課　市川康▼明治学院大学学生部学生課主任　内藤美枝子　総務部総務課長　今野清文▼順天堂大学学生課　内村暁▼武蔵大学学生部学生生活課長　大沢勝▼東京理科大学庶務課　浦沢光夫▼東洋大学学生部学生課　橋本光五郎▼専修大学学生厚生部学生生活課次長　村田正敏▼大妻女子大学学生部長　緒方真也▼聖心女子大学教職渉外課長　川島茂蔵▼神奈川大学学務課長　成田秀之学生課　川端輝夫▼東海大学教務部事務室次長　大本雄一▼駒沢大学総務部法人課係長　竹内正允▼東京薬科大学学生課長　佐々木孝▼相模女子大学学生課長　片野孝治　同課主事補　落合明

第104回大学共同セミナー

主題――ルソーと共に現代を問う

人間は自由なものとして生まれた

期日――昭和54年10月12～14日

＜全体講義＞

Ⅰ　ルソーの生涯と作品
立教大学助教授　原　好男氏

Ⅱ　ルソーの読まれ方
東京大学教授　小林善彦氏

＜ゲスト講演　レコードコンサート＞　ルソーを聴く
国立音楽大学学長　海老沢敏氏

＜セクション演習＞

A　ルソーの文明批判――とくにユング心理学からみた場合――
東京女子大学教授　林　道義氏

B　自立した人間を育てるもの――教育における自由ときびしさの問題――
立教大学教授　室　俊司氏

C　政治における自由と疎外――『社会契約論』を中心に――
お茶の水女大助教授　宮島　喬氏

D　自伝のなかのルソー――『孤独な散歩者の夢想』をめぐって――
立教大学助教授　原　好男氏

E　初期のルソー思想――自然状態をめぐって――
東京大学教授　小林善彦氏
（運営委員）

＜参加学生＞46名（内女子20名）早大(10)、立教大(7)、東大(4)、東京外大(3)、筑波大、東京医歯大、東京農工大、慶大(各2)、お茶の水女大、青学大、ICU、駒澤大、専修大、中大、津田塾大、東女大、日女大、法大(各1)、上智短期大(4)、合計19校。

◇◇◇

ルソー没後二百年を記念して、七八年にはジャーナリズムで多くの特集が組まれたが、あえて一年ずらしてルソーを取り上げてみたら、という声が期せずして数人の委員から共同セミナー委員会で出てきた。企画の具体化に当たっては幸いにもルソーの翻訳家として著名な小林善彦氏のご快諾が得られ、ここに共同セミナー史上初めてルソーが俎上にのせられることになったのである。

◇◇◇

プログラムの冒頭では、ルソーに関する最少限の知識を共有することを目的として、全体講義Ⅰ、Ⅱが組まれ、ルソーの生きた時代と社会、彼の生涯と作品、そして現代に至るまでの作品の読まれ方が平明に提示されたが、そのことは今回の主題にあるように現代におけるわれわれの問題に根源からせまるものであり、セクション演習は初日から早くも白熱化したようであった。

二日目午後には、ルソーの音楽の研究で世界の第一人者であられる海老沢敏氏をお招きし、ルソーの作品を鑑賞するという、得難い機会が与えられた。氏は、ルソーの作品といわれる「むすんでひらいて」の原曲がルソー的音楽の基本的あり方であることを、レコードやテープを通して明らかにされた。とりわけ、彼の作品（一五〇曲に及ぶ作品のほとんどが声楽曲であるという）の中から、「おお春よ、お前は戻って来たのだ」「村の占師」など五曲を通して、ルソー自身が「記憶の記号」と位置づけた音楽の本質の一端を鑑賞することができ、参加者はルソー理解に新鮮な視点を与えられた。

引き続いて行われた指導教授全員によるパネルディスカッション「ルソーと現代」では、〝自然状態〟と〝社会状態〟をめぐって興味ある議論が展開されたが、ルソーの個人生活にあらわれる二極対立の側面や、彼の作品にみられる論理的矛盾をどう考えるか、といった点から議論はルソーの思想をとらえる方法論の問題にまで及び秋の夜長、討論は必然的に各セクションへと持ち込まれていった。

◇◇◇

ルソーが現代の若者にどのようにアッピールするか、企画側としては興味のあるところであったが、予想を下廻り、参加者が五〇名に及ばなかったのは大変残念なことであった。しかしながら、政治、教育、文学等々、様々な領域で読まれているルソーこそ、大学や専門の異なる教授陣と男女学生で構成される共同セミナーには格好の〝思考材料〟であり、現代社会が抱える問題を若い人の視点でとらえようとする姿勢が随所に伺われ、手応えの感じられたセミナーであった。

◇企画者の立場から

東京大学教授　小林善彦

「ルソーは日本でよく読まれているのでしょう。それも単なる古典としてではなく、現代のわれわれに問いかける思想家として、とらえることができるなら、ひとつ三日間かけて皆さんと議論してみようではありませんか。」

このような意味のお誘いを、飯田宗一郎館長と荒川幾男先生から受けたのは、まだ夏のはじめ、6月の半ば過ぎ頃であった。「いいですね、やりましょう」とお引き受けしたわたしは、それから何度となく企画室の飯田能子さんと連絡をとりながら準備をはじめた。

なにしろルソーの著作は、実に多方面にわたるのであるから、さまざまな領域の専門の先生方に、参加していただかなければならない。それに専門の研究者というだけではなく、学生諸君にとって魅力的な方に来ていただきたいと考えた。幸いにして、林道義、原好男、宮島喬、室俊司の諸先生に御承諾をいただけたのは本当に嬉しかった。その上、海老沢敏先生が学長のお仕事でお忙しいなかを、ルソーの音楽についての解説と、レコードのコンサートをして下さったのだから、今ふり返っても素晴らしい顔ぶれであったと自画自讃している。

募集した時期が夏休み中であったためであろうか。学生諸君の申込みは、最後になって急にふえたものの、予定よりも少なかったのは残念であった。しかし人数が比較的に少なければ、親しく知り合う機会は大きい。わずかに二泊三日であったけれども、朝から晩まで、そしてついには東の空が白んでくるまで、ルソーを論じ、その他もろもろのことを語り合った学生諸君は、大学の教室で知り合うのとは違った親しさを持ったと思う。セミナーが終って、丘を去り難く感じたのは、わたしだけではなかったと信じている。

最後に、この共同セミナーを行うに当たって、飯田館長をはじめ、セミナー・ハウスの職員の方方の献身的な御援助をいただいたことを心から御礼申し上げたい。ルソー研究のような、従来の狭い専門分野をこえた学際的なテーマを、大学の壁をとり払って討論できるのは、大学セミナー・ハウスだからこそ可能であろう。そのセミナー・ハウスが、訪れるごとに少しずつ確実に充実していくのを見るのは楽しい。だがそのためには、館長をはじめ職員の方々の御苦心は大変なものだと思う。単なる儀礼的な挨拶ではなく、心から

（4ページよりつづく）

り、全員の賛成をみた。

なお、記念行事の中心は、当初の計画どおり秋に開催されるが、記念セミナーは社会科学の領域で企画することが確認され、企画室で検討を進めることになった。

前列左から原，林，室，小林，海老沢，宮島，飯田の諸氏

大学セミナー・ハウスの発展を祈り願うものである。

◇新鮮な体験

石橋 俊

常々友人から共同セミナーの話をきかされており、一度参加してみようと思っていたが、なかなかその機を得ずにいたところへ今回のテーマを唱ったポスターを大学の食堂のうす暗い階段に発見した。魅力的だが不可能であり、大いに共感するが、時折嫌悪すら覚えるという、僕にとってはタダ者ではないのがルソーという男である。ちょっと分析的な説明を試みると、当の自分が根底から問い返されるという不愉快さのために、しばらく御無沙汰していた。一方、「共に現代を問う」という大仰で誇大だが、どこかユーモラスな題目はしっかりと僕をひきつけた。さっそく本箱の奥で変色している文庫本を引っぱり出し、机の上に積み上げて、学校から帰ると少しずつ読み返してみたのだが、あまり進まないし、読んだはずの所もことごとく忘れているし、自分のルソー理解がひどく歪んでいたのにあきれもしたが、とにかく参加を決意した。

セミナーの印象は一言でいって、非常にエキサイティングであった。多少上擦ったところなきにしもあらずだが、お互い様なので何ともいえず愉快である。小林善彦先生の「ルソー誤解史—日本編」——日本でのルソー理解は明治以来の西洋化の中で、それぞれの時代に応じた部分的共感から、次第に全体像へ接近してゆくという卓越した視点に驚かされた。林道義先生のお話は、蓋しルソー学のギャグである。ユング心理学を駆使したアプローチは新鮮であり、ルソーの風貌をかえる程の迫力がある。その奥にうかがえる文明批評も冴えている（ルソーの迫害妄想の解釈について、僕はスタロバンスキーの説を盲信していたのだが、林先生のヨブ体験説が対置させられ、ますます訳がわからなくなっている）。先生のセクションには、ユング心理学通の人や林道義ファンともいうべき人が集まったのに、僕はどっちでもなく、大いに恐縮したが、ルソー学のアウトサイダーを標榜し、自らの思想遍歴も蕩児の如き氏にたちまち夢中になった。とはいえ、討論では大分滅茶苦茶をいった。

セミナーの終った今、多くの問題が僕の頭を埋め尽している。過飽和に近いので、統一性を欠いた読書と思いつきに終始しているが、いつしか、より遠くへ射程をもつ展望が開ける時が来るのを夢見ている。

蛇足であるが、僕は日本の大学も社会も窮極はインサイダーだと思っている（モラトリアムというべきか）。共同セミナーが、アウトサイダーといわないまでも、透徹した目と、初々しい活気に満ちているのをうれしく思った。現に八王子は東京の外である。空は青いし芋はうまい。

（東京大学医学部4年）

第105回大学共同セミナー

主題——日本人と〈家〉

新しい人間の絆を求めて

期日——昭和54年11月9～11日

〈全体講義〉

家の理念と実態　東洋大学名誉教授　小山　隆氏

〈ゲスト講演〉

私の〈家〉体験　作家　加賀乙彦氏

〈セクション演習〉

A　家と家族—家族とは何か—　早稲田大学教授　正岡寛司氏

B　民家と村の生活　武蔵野美術大学講師　相沢韶男氏

C　人間関係の確立への苦闘—漱石「行人」にみる家の倫理—　日本女子大学教授　熊坂敦子氏

D　家の崩壊からの出発—「斜陽」に見る無頼派の倫理—　武蔵大学教授　鳥居邦朗氏

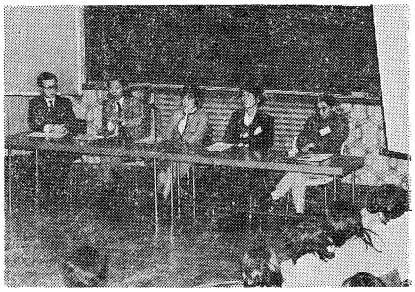
〈運営委員〉

慶応義塾大学教授　山岸　健氏
日本女子大学教授　熊坂敦子氏

〈参加学生〉67名（内女子48名）

日女大(24)、武蔵大(4)、慶大、早大、津田塾大、共立女子短大(各3)、お茶の水女大、東京外語大、東京工大、横浜国大、駒沢大、成蹊大、鶴見大、立教大（各2）、東大、一橋大、都立大、学習院大、共立女子大、昭和女子大、専修大、多摩美大、東女大、東洋大、フェリス女学院各(1)、計25校

◇◇◇



シンポジウム，右から正岡，相沢，熊坂，鳥居，山岸の諸氏

〈家〉とは何か。日本社会の人間関係を解くに際して〈家〉は現在もなおこの問題の基底部分照明への有力なキーワードになっている。かつて日本の社会秩序形成の根幹をなしていた家父長制、〈家〉の理念と構造、戦後の解放がみちびき出した核家族志向のファミリー世界、生活空間を規定することによって人間の精神領域をも規定しつつある住居としての家屋。家・ファミリー・ハウスというこの三つのキーワードについて、それぞれのニュアンスを損うことなく、また切りはなした形でではなく、正しい形への組合わせを模索、実験しながら、日本社会の生きた人間存在を考えてみたい。それには従来の社会学の領域だけでなく、社会科学の世界と文学の世界をできるだけ深い部分で接近させることによって新しい解明を試みてみたいというのが、運営委員として企画指導に当たられた山岸、熊坂両教授の意図であった。

問題が問題だけに模索と実験がかならずしも満足できる地点まで到達したわけではないが、全体講義に当たられた小山隆教授以下各指導教授の熱心なご協力、作家加賀乙彦氏のゲスト参加のお蔭で、終始学生たちとの間に真剣な討議が交わされた。

◇◇◇

小山氏が戦前から戦後にわたる多年の実証研究をもとに家および家族理念の変遷過程とそれをめぐる社会学説を事こまかに説かれた全体講義を受けて、正岡氏は同じ社会学の立場から現在の変動しつつある家族生活の実態につき、やがてこの核家族化傾向をもこえるものとして〈愛〉の実質的意味と役割の究明を大きく呼びかけられた。性、血族的結合、生活共有を軸にすえた在来の〈家族〉観に対する一つの実証的批判を試み、明日への課題を学生に提示されたものといえよう。

相沢氏が二日目のシンポジウムの冒頭に、氏自身撮影のスライド写真を用いてなされた「民家と村の生活」の実地報告は学生に強烈な印象を与えた。氏が、学生時代に建築家を志望し現物を見に全国行脚に出た過程で現代建築より民家に魅せられたこと、そして甲州街道に沿った民家の草屋根が笹子峠を境に形を変えることに気がつき、やがて、それらが南会津の渡り職人の手になることを知ったこと、北関東一円をふいて歩いたかれらの生きた生活の歴史に興味を持ち、会津の一部落内に住み着き、約十年余、昼間働き、夜、聞き取りをつづけるに至ったこと等等、そこでの屋根ふき作業、家の構造、家の中で取り行われる冠婚

（次ページ4段目へつづく）

▼ゲスト講演要旨▲

私の〈家〉体験

加賀乙彦

ガストン・バシュラールというフランスの精神分析学者は人間をとりまく環境の中で一番基礎的な元素として、土・水・風・火の四つをあげる。中でも土、土地という空間、そこに建つ家の構造は人間の形成、感性の成熟にとってきわめて重要だとする。多くの作家は自分が幼年時代を過した家、誕生の家をくりかえし書いている。そして子どもの頃、かくれんぼをし、鬼ごっこをした場所を懐かしむ。独立性と秘密というものは密接な関係にあり、秘密をもつことによって子どもは独立を知る。

隠れ場所というと、昔の日本の家では納戸があり押入があり床下があり屋根裏があった。ヨーロッパの場合、典型的にはたいていい地下室があり屋根裏部屋があって、これが子どもや貧しい学生たちの部屋に当てられる。これを樹木の構造にたとえれば地下室が根、幹の部分にリビングといくつかの個室、その上に梢に当たる屋根裏部屋がある。秘密、孤独、夢想を育てたのがこの地下室または屋根裏部屋だった。

スイスの精神分析医、ユングは理想の家として、前に湖、後ろに森をひかえ、塔のように高くそびえる立派な家を空想し、晩年ついにこの夢を達成して死んだ。その間のかれの「家」についての思索の過程は「ユング自伝」に読むことができる。

私の家についていえば、私は戦前、新宿の西大久保、今の歌舞伎町に育った。新宿の街を裏に入った住宅地で、それぞれ百坪余の庭つきで、大きな樹木があり、生垣があり、遊ぶにも、かくれんぼをするにも不自由のない木造の、だいたいが二階建の家々が並んでいた。町全体が森の中の感じで、隣り近所との往き来もあり、戸外からは電車の音、馬車の音、物売りの音、子どもの歓声などがごく自然に入ってきて、そこにコミュニティー感が出来ていた。また原っぱというものが東京の街なかにも結構あって、子どもたちの恰好の遊び場となり、かれらの空想をはばたかせた。

それが戦災でたちまち灰に化した。私の家ではそれでも焼跡に昔の何分の一かの木造家を建て、ともかく生活を復活させえたのは幸せだった。しかし、それも戦後一五年ほど経つと、見る見る一変してゆく。ある日、突然わが家の隣りに奇妙な建物が立ちはじめる。いわゆる連れ込みホテルで、楽音、嬌声がモロに入ってくる。近所の人たちもつぎつぎ逃げ出し、ついにわが家は三方、同じようなホテルに包囲されるに至る。加えて、こんどは猛烈なモータリゼーションの波。65年前後からか、すぐ前の明治通りが昼夜の別なく車の洪水に見舞われ、とても住める状況ではなくなる。ともかく防音設備のある住いへというので、移り住んだのが今の本郷のマンションである。

移って一週間後ぐらいだったか元の家跡へ行ってみて驚いた。前日までそこに実在した建物が姿を消し、辺り一面、木屑だけ。今はもう生れ故郷もない根無し草になったという、戦中戦後多くの人が味わった喪失感を私もこんど、あらためて実感した。

さてマンションに住んでみると、これはもう土地とか自然とかいったものとは無縁で、すべて機能が優先する。かくれんぼどころではない。そのかわり個室があるじゃないかといわれるかも知れないけれども、これはあくまで与えられたもの。自分の手で探し出し作り出すものとは本質的に違う。

秘密を保てるのは便所と個室だけ、これは刑務所とそっくりだ。「たった一人になれない苦痛、これが囚人の最大の苦痛だ」とはドストエフスキーの「死の家の記録」に出てくることばだが、わが子たちが同じ苦痛から免れていれば幸いだ。

秘密をもてない子は人間として成熟を知らず、大人になれない。それに拍車をかけるのが現代の母親だ。すくすく育った子ほど、ある困難なことにぶつかるとポキッと折れる。そうしたモラトリアム人間が、どうも現在の「家」の構造と無関係ではないように、私の直観はつかんでいる。（文責・編集者）

（6ページよりつづく）

葬祭、村の年中行事など、一つ一つをスライドで見せながらの氏の解説は、自らの目と耳と足で実態を探る、まさに民俗学本来の学究姿勢を示すものとして多大の感銘をもたらした。

熊坂、鳥居両氏にはそれぞれ漱石の「行人」、太宰治の「斜陽」を手がかりに、近代日本の作家が宿命的に対決せざるをえなかった〈家〉の重圧とそれからの自己解放のあり方を問い、学生との間に終始密度の高い意見交換の場を醸成していただいた。

なお、慶応義塾大学助教授平野敏政氏が、オブザーバーとして一泊され、社会学の立場から家族の定義をめぐる討論に参加されたことを付記しておきたい。

家と「行人」

日本女子大学教授　熊坂　敦子

なだらかな坂道を登りつめると、行手に瀟洒なセミナー・ハウスの本館が現われてくる、道に寒椿が点々と、冬枯の自然に紅く可憐な彩りを添えている、春ともなればこの自然は、いっそう鮮かなとりどりの生色に満ちてくるであろう。万物の生命を育む自然は、今回の家のテーマとも無関係ではないような気がする。家は近代的自我の成立期を迎えて、さまざまな問題を内包した。複数世代による生活共同体的な秩序や倫理では、律しきれなくなった。近時は、とくにその傾向がいちじるしい。家を構成する個々の人間性が一義となってきたからである。

明治以降、文学では人間意識の近代化とともに、家がさまざまに登場する。作家の反応は多様な軌跡を示したが、当然ながら家のもつ拘束的な側面が、視座の中心となっている。漱石もまた、それに大きな関心を示し、そのあり方に苦慮したひとりである。「行人」は、家父長権の座に家の期待をになう一面で、倨傲な孤独にさいなまれる知識人一郎の悲劇が描かれている。一郎は理解されがたい孤独な自我を意識することによって、妻直における愛のスピリットの確証を求めた。一郎にとって、愛を把握することの不安と懐疑に満ちた内心の葛藤が始まる。その対等の人間関係には、妻にひとりの女性としての人格を認める近代的な考え方が示されている。しかし一郎が、飽くことなく求め、求め得ないことに懊悩する愛の実体とは、何であったのだろうか。人間不信によって相手を理解し許容できないのであれば、一郎はますます孤独に陥るほかない。家における人間関係に疲弊し、そのかけはしを探しあぐねる一郎は、旅に出でひたすら自然に自己救済を求めるほかなかったのである。

Cセクションの「人間関係の確立への苦闘」は、このような「行人」論を中心に、活発な討論が続いた。自我にめざめた一郎の我執と、家婦の場にある直の屈折した愛に迫る発言が、印象的であった。一郎が家から脱出して自然に感じる「絶対」は、難解なりに、いかにも創造的な考え方を表明したのが、注目された。「行人」の文学的主題の追究は、それなりに岐路に立つ家の問題を明らかにし、それを構成する人間関係の信

（次ページ5段目へつづく）

◆千人会

昭和54年10～11月

◇現在会員は一、五九三名です

大学人＝一、二〇〇名
社会人＝　三九三名

◇新しく会員となられた方々

8名〔第51回報告（申込順）〕

C　専修大学教授　崎野　滋樹殿
B　日本大助教授　石山　伍夫殿
A　学習院大教授　兵頭　次郎殿
B　麻布高校教諭　森　昭彦殿
B　武蔵大学教授　鳥居　邦朗殿
B　城北高校教諭　石崎　廣義殿
B　日本度量衡器㈱役員　笠井　伍朗殿
C　玉川大助教授　米山　弘殿

◇会費ありがとうございます

昭和54年10～11月（敬称略）

岡村甫、小島達治、宮川透、尾形憲、関口利男、中村正久、木村富夫、岡野澄、千葉正士、佐藤康男、河野恵、白浜謙一、森川和久、山本茂、兵頭次郎、石山伍夫、堀川浩甫、栗原照子、近藤晃、山口喬、末松安晴、矢吹晋、西川潤、高橋泰蔵、神田信夫、松田千鶴子、大竹誠、村島家子、重田信一、佐藤誠三郎、辻キヨ、宮坂宏、岩崎不二子、柴田愛子、永澤越郎、宮下啓三、岡茂男、東寿太郎、冲中重雄、安達義明、飯島泰蔵、小林忠義、加藤一郎、田端光美、小保方宇三郎、大友昌子、飯田経夫、長津一郎、藤田淑子、青木俊一、小倉安之、久武雅夫、鈴木喬、筑波常治、川原栄峰、布川角左衛門、大村政男、佐々木克己、市川慎一、横田洋三、小田中敏男、田村献、平沢興、川鍋正敏、久保良雄、加藤五六、小川芳男、石川静一、板垣與一、稲垣寛、今井淳、野田良之、小谷正雄、広瀬五十鈴、室俊司、松岡八郎、原豊、森井眞、伏見弘、江尻美穂子、藤永保、舘盛晴、堀江忠男、新田悟、田村康男、井関利明、小河原正巳、堀光男、安達健、高須裕三、久場嬉子、高橋三郎、小野沢精一、大坪秀二、坂野観司、八木江里、尾形典男、森岡清美、大貫一、宇都栄子、赤堀四郎、宮野彬、神保信一、岩浅武雄、横山実、石川正一、井上勝也、堀信一、玉虫文一、牧内操、秋田成就、川田侃、島田徳三、松田稔子、福田隆義、春木美知子、鶴岡義一、岡村秀勇、武者小路公秀、佐久間徹、宮崎繁樹、佐原六郎、田島澄江、森田信義、藤村瞬一、藤林宏一、大東百合子、祖父江孝男、斉川仁、釜萢善一、石川吉右衛門、寺東寛治、太田時男、榊原祐輔、清水護、高野雄一、一ノ瀬智司、戸塚元吉、山本登、戸田盛和、神山妙子、前田陽一、笹島恒輔、飯田八千代、清水英夫、貝塚爽平、山本大二郎、須田精二郎、田村光三、宇野重昭、白井常、杉澤新一、磯部浩一、満屋寿男、鈴木順子、内田章五、井門富二夫、吉武泰水、小林澈郎、田村晥司、宮部菊男、吉沢英子、山本よしゑ、小田滋、中沢正和、佐藤公子、阪田正三、山口清隆、山口貞雄、馬場明男、国分康孝、石崎廣義、笠井伍朗、太田正孝、高木仁、小浪充、弓削三男、内海正志、坂口順治、梶木隆一、関嘉彦、田原虎次、外池正治、高橋七五三、木下是雄、大神田正義、柴田菊代、中岡和子、中井虎一、衛藤審吉、納富照枝、平野文彦、バッケス・ジャン、伊藤玄三、小川捷之、飯田芳男、小川利子、山崎典、相馬勝夫、今道友信、田中弥寿雄、今井哲哉、松本樺太、城謙輔、水野伝一、池川郁子、田中正人、平島正喜、竹内与之助、森繁雄、渡辺仁、青木生子、江副敏生、松元文子、小松八郎、米山弘、米満澄、鈴木慎一、田島賢一、高橋正男、新井益太郎、勝木保次、村瀬興雄、近藤保、石川明、外池孝雄、田中外次、細田友雄、矢澤修次郎、高橋浩爾、奥繁光

◇会費に添えられたことばを拾う

今年をもって八十の齢を迎えました。本日はご丁重なお祝詞を賜わり有難く厚くお礼申上げます。千人会ご結成に当り賛成いたしましてより十ヵ年余になりました。小生もOBになりました。先般ライフ・ワークとして「日本のポットホール」を古今書院より出版しました。記念にご送本いたしました。成蹊大学名誉教授　伊藤隆吉

♥

今年のカードには飯田先生のご直筆がみられずお忙しいのだろうと思っておりましたところ、受領通知とともに、ハガキいっぱいに書かれた先生のおことばを受けとりました。どんなにセミナー・ハウスが大きくなっても、変らぬ先生のお心をすばらしく思いました。「建築文化」9月号の大学セミナー・ハウス特集を拝見して、これから先のますますのご発展を祈っております。　城　範子

♥

私のセミナーも十年になりましたので、想を新たにすることにし、いずれまた皆の意見のまとまるのを待ち、御相談申しあげたく存じます。

近着のニュースで千葉大学が協力会員校に加入したことを知り、今迄のようにどことなく肩身の狭い思いをしないですむかと思い、大変うれしく存じます。

千葉大学教授　井上勝也

♥

千人会の美しいカードありがとうございました。おやもう誕生日が来たかとガッカリしております。一休さんの「冥土の旅の一里塚」を思い出し、がんばらなくてはと思っています。

高等教育の改革に教育工学の適用を試みて、はや十年以上たちました。教員懇談会でも一つ教育方法などとりあげては如何でしょう。

東京工大教授　末武国弘

♥

御隆昌をお祝い申し上げております。

一橋大学名誉教授　高橋泰蔵

♥

この頃は御ぶさたしています。10月9日で六十九年が過ぎます。目下、学校行政で忙しくしています。

大正大学教授　重田信一

♥

この数年、多難な年が続きまして、何回か会費をお休みさせて頂きましたが、またこの秋より参加させていただきます。

自営業手伝い　村島家子

♥

自分の絵で誕生日を祝われるとはおもはゆいことです。

（7ページよりつづく）

頼と親愛による結合の重要性を示唆した。心のよりどころ、生命の根源としての家の存在意義を、新たに考えさせたのである。セミナー委員、運営委員としてとまどうことが多かったが、学生との直接の話し合いを通じて、今回のテーマが今もって新しい問題であることを、改めて認識したのである。

慶応義塾大学教授　宮下啓三

♥

美しい誕生祝いのカード有難うございました。時々の「セミナー・ハウス」を拝誦しその発展を心からうれしく存じます。ハウスにはご無沙汰していますが、そのうちうかがう折を楽しみにしております。

会社役員　釜萢善一

♥

飯田先生はじめ皆様お元気ですか。武蔵工業大助教授　木村富夫

♥

4月に学生と伺ったときは、新しい設備が出来ておりびっくりしました。一層の発展を祈ります。

法政大学助教授　佐藤康男

♥

今回は一万円お送りします。還暦、明春退官を前に長岡技術科学大学専任、東京工大は併任となりました。

中村正久

♥

8月中旬より専修大生25名に他大学生を加えた総勢64名の学生諸君とヨーロッパを馳足で旅行をいたして参り、誕生日9月3日はロンドンで過しました。現代学生気質を知る良い機会でした。

専修大学　宮坂　宏

♥

宮下画伯の美しいカードに感心しました。入会後十三年目の誕生日、たまたま一九七二年の名簿を見ていましたら、恩師が、また私より年の若い友人が亡くなられていたり、感無量でした。発展を祈り上げます。
武蔵大学教授　今井　淳

♥

昨年6月末より日本学術振興会派遣による交換研究員として在仏し、この9月に帰国しましたので会費納入が遅れましたことをお詫びいたします。
早稲田大学助教授　市川慎一

♥

昨年度の会費、うっかりして未納のままでしたので、今回二年分お送りします。近くまた利用させていただく予定です。
東洋大学助教授　堀　光男

♥

いつも誕生日のたびに美しいカードありがとうございます。この齢になりますと、ほかには誰もカードを送ってくれません（教会は別ですが）。嬉しく貴重なカードを拝見しています。
成蹊大学教授　宇野重昭

♥

美しいカードをありがとうございました。新入生オリエンテーションゼミを通して、飯田先生をはじめ皆様のご活躍に直接ふれ、私も自分の仕事に情熱をかりたてる思いがしております。来春も飯田先生のお話を楽しみにいたしております。東海大医療技術短大助手
山本よしゑ

♥

美しいカードをありがとうございました。誕生日は次第に思い出したくない〝日〟となりつつありますが、またそれであるからこそ、このようなカードをいただくことで〝限りある人生〟への思いを新たに、来る一年を大切に生きたいと気持を引き締めることができます。
大東文化大　鈴木順子

♥

いつも頂くカードに心暖まる思いをさせていただいております。感謝とともに少額ですが、お送りいたします。
関東学院大学教授　吉沢英子

♥

幸い健康に恵まれ定年後二年を経過しましたが、未だ講義だけは続けております。懐しい思い出をもったセミナー・ハウスの益々のご発展を祈っております。
明治大学講師　内田章五

♥

カードありがとうございました。セミナー・ハウスの御発展をお祈り申し上げます。飯田先生、どうかお元気でお過し下さいませ。
主婦　池川郁子

♥

この夏休み帰国いたしました時、たまたま日加会議に参加させて頂くことができて幸いでした。セミナー・ハウスの発展をいつも祈っています。ミシガン州立大学
大学院生　今井哲哉

♥

毎年いろいろな会費を納めておりますが、千人会費はご案内の絵を見ながら楽しくご送金できますことを嬉しく存じます。
女子栄養大学教授　松元文子

♥

新しい年の御多幸をお祈り申し上げます。御無沙汰していますが久しぶりに自由な大学の空気に触れた思いです。
在米大使館公使　小和田恆
（ハーヴァード大学客員教授）

協力会員校事務連絡会，挨拶する茅理事長。
前列は座長の岸伸年氏と副座長の佐々木孝氏

寄付金報告

54年11月末現在

ご支援を感謝して拝受いたしました。

≪一般寄付金≫

10,000円　おさひめ幼稚園殿

≪視聴覚施設・設備充実募金≫

150,010円　第16回大学教員懇談会参加者一同殿

10,000円　日本経済新聞編集委員黒羽亮一殿

165,200円　大学入試センター所長加藤陸奥雄殿

10,000円　東京大学教授寺山　宏殿

7,000円　早稲田大学教授浅井邦二殿

150,850円　第104回大学共同セミナー参加学生一同殿

20,000円　上智大学教授高野雄一殿

50,000円　日本女子大学附属高校代表教諭　北川定男殿

150,000円　第105回大学共同セミナー指導教授
早稲田大学教授　正岡寛司殿
武蔵美術大講師　相沢韶男殿
日本女子大学教授　熊坂敦子殿
武蔵大学教授　鳥居邦朗殿
慶応義塾大学教授　山岸　健殿

10,400円　第105回大学共同セミナー参加学生一同殿

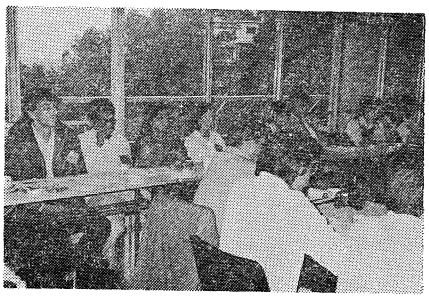
7,100円　慶応義塾大学助教授　平野敏政殿

30,500円　日本学術振興会人事交流課長　阿部美哉殿

寄贈図書

54年9～10月

「金融経済」No. 177　金融経済研究所殿
「エナジー対話　方丈記を読む」
「エッソスタンダード石油広報部殿
「現代詩研究」No. 294　現代詩研究所殿
「アジアの友」7～9月号　アジア学生文化協会殿
「Asian Culture」23　ユネスコ・アジア文化センター殿
「採集と飼育」9～10月　日本科学協会殿
「早稲田フォーラム」No. 26　早稲田大学殿
「国際交流」No. 21　国際交流基金殿
「日本伝統音楽の研究1」「エスキモーの歌」「空想音楽大学」「音楽の根源にあるもの」「民族音楽研究ノート」「日本の音」　小泉文夫殿
「明治政党史」「明治期の社会主義政党」　松岡八郎殿
「純粋理性批判入門」　高峯一愚殿
「資源からの発想」　加藤　辿殿
「生涯教育学」　平澤　薫殿
「現代をいかに生きるか」　宮田光雄殿
「日本のポットホール」　伊藤隆吉殿
「和魂和才のすすめ」　木村尚三郎殿
「工業力学」　長松昭男殿
「国際協力」9　国際協力事業団殿
「システム科学研究所紀要」10号　早稲田大学同研究所殿
「政治経済史学」158～161　政治経済史学会殿
「高畑政信博士論文選集」　島　正之殿
「大学と職業」　大学職業指導研究会殿
「老後のライフワーク」　高須裕三殿
「ロシア社会思想とスラヴ主義」　今井義夫殿


法政大学第2回国際交流合宿セミナー

●事業部だより

●10・11月の利用概況

夏休みの最後あるいはその直後を利用したゼミの合宿が極めて多かった9月に比べると、授業再開後の10月は、いずれも満杯の週末を除けば、大学のゼミの利用は低下する。これに代って、秋の10・11月は例年のように、学会やその他の研究集会が多くなる。順天堂大病院業務改善セミナー、関東甲信越地区国立学校等係長研修会、CIP化合研究会、哺乳類研究グループ、現象学・解釈学研究会、日本油化学協会、日本生活学会、放電研究グループ、地域構造研究会などで、この中にはこの季節の常連となったものが少なくない。また、夏に引続きこの両月にも、法大の国際交流合宿セミナー、日豪合同セミナー、12月にかけて開催された統計気候学国際学会などの国際的諸集会を迎えることができた。両月の利用を数字で示すと、10月がグループ数九〇、宿泊延人数三、六五二人、11月がグループ数一〇五、宿泊延人数三、六三二人となる。

●会員校および会員校を当番校とする事務職員研修

当ハウスでの開催十一回目という恒例の順天堂大「病院業務改善セミナー」では、今年も有山理事長・懸田学長、宮崎院長等が率先指導にあたられ、同院各部署からの職員計一一二名は部署を超えた四つのグループに分かれて交流、今回の課題「接点業務の合理化のための業務改善」について真剣な討議を行った。10月6日夜の交友館での懇親パーティには当ハウス飯田館長、岡山専務理事も出席、同大学との友好を一層深めることができた。

第17回関東甲信越地区国立学校等係長研修は10月16日から三泊四日で開催され、二四大学（うち当ハウスの会員校は一二校）、一短大、七高専、三共同利用機関、計三五機関からの六六名が参加した。大学関係者、文部省事務官等計八名による講演、そして演習、映画、遠足、交友館での懇親会など盛沢山の日程を消化した。最終日研修が終了したところで、参加者は折から東京を襲った台風20号に遭遇することとなったが、夕刻までには全員無事帰途につくことができた。今回の研修会は東京医科歯科大が当番校となって開催されたものであるが、今後会員校が同様の「宿泊を伴う研修」の企画・運営を担当される際には、是非当ハウスを会場とされるよう、お勧めしたい。

●恒例の日豪合同セミナー

この丘の紅葉が最も美しい季節の国際集会としてもうすっかり定例化したのは「日豪合同セミナー」である。当ハウス主催の国際学生セミナーに参加した豪州の留学生五名が中心となって昭和49年に開催した〝日豪関係セミナー〟と、その後日豪学術文化センターがそれを継承して開催してきたものとを合わせると、今回のセミナーは通算で四回目となる。当初は学生が主体のセミナーであったが、その後年々各界の有識者・専門家など幅広い層の参加を得るようになって発展してきた。これまで三年連続参加され、今回も開会式直後の講演を引受けられたジョン・メナデュー在日オーストラリア大使、同じく講演者の斎藤鎮男元在豪日本大使、今回は家族同伴で国際セミナー館に宿泊されたグレゴリー・クラーク上智大客員教授などの内外の指導者を含め、今年の参加者は計九二名。「両国の80年代への期待」をテーマに、三つの分科会では「移民問題」「エネルギー問題」「相互理解」等について熱心な意見の交換が行われた。

●新しい企画の紹介——法大「国際交流合宿セミナー」

11月初旬の週末には、法政大学の「国際交流合宿セミナー」が、春に引続き二回目の合宿を実施している。主催は同大学第二教養部で、その実施面では、一昨年同大学に発足した国際交流センター（内外の学者・留学生の受入れ・送り出し、その他の国際事業を行っている）が後援している。

第1回は54年3月、「今日の世界に有効な人生哲学—若者の生き方を考える—」をテーマに、米国から二人のクェーカーの指導者を招いて行われ、期待以上の反響をよんだものであるが、この秋の第2回のプログラムは、第1回の成果の上に、同セミナー参加学生の有志が主体となり、自主的に作り上げたものだという。

今回のテーマは「ことばと社会—ことばをめぐっての異文化、異社会の比較—」。この合宿セミナーのねらいは、「さまざまな文化や社会にまたがって広い経験をもたれる国際的教授陣に、比較文化論、比較言語学、社会言語学、文化人類学等の各視点から話題を提供していただき、その上で日本人学生、各国の留学生、さらには講師の先生方のご家族とが共同生活の中で交流をはかる」という大変に意欲的なもの。まことに国際セミナー館建設の趣旨にかなったプログラムというべきである。

今回の参加者は計四五名。指導陣の中には「ラガナ一家のニッポン日記」等で有名なアルゼンチンのラガナ先生、一ダース以上の言語を軽くあやつるインドのダスグプタ先生、元カイロ大学客員教授久山宗彦先生などである。

ゼミでの使用言語は「英語と日本語」だった筈なのに、ギリシア・ラテン・ヘブライ・アラビア・ヒンディー・ベンガリー・タミルなど、ありとあらゆることばや見慣れない文字が黒板を埋めつくすようすはみごとだった。ラガナ、ダスグプタ両先生の御家族や、エジプト・ミクロネシア・東南アジアからの留学生諸君も交えての、文字通り国際交流ができたのもよかったが、ゼミを通じて学生同士、学生と教員、そして教員同士が深いつながりを得ることができたのも幸いであった。

いかにも秋色の濃い多摩の一角で行うにふさわしいゼミを終えて、学生諸君はいま、今回のゼミのまとめや文集づくり、そしてもう第3回目への企画に精をだしている。

第2回国際交流合宿セミナー——異称〝八王子ゼミ〟の顛末

法政大学教授 小西正捷

学生数三万人のマンモス大学、しかも二部教養の教員として、大教室等での一方交通的講義に常にうしろめたいものを感じていた。学生諸君の間でも、何か疎外感が窺える。それならセミナー・ハウスがやっているような共同セミナーなどで新しい仲間をみつければいいのに、その積極性もない。とすればむしろ足元から、法政なりのミニ共同セミナーをやってみようと考えた。そして学生諸君が、今回はついに計画から司会・運営まで、ほとんど独力で合宿ゼミをやってのけたのをみて、文字通り瞠目した。

その背景には本年3月、アメリカからキリスト教平和団体の二人の先生方をお呼びして、やはりセミナー・ハウスで行った第1回のセミナーの成果があった。それに参加した学生諸君たちから、自主的に第2回目をやってみようという声があがったのである。

今回のテーマは「ことばと社会」。ことばを通じて異文化・異社会の構造を比較しつつ、文化におけることばのあり方をさぐってみよう、という企てである。幸い講師陣には数多くのことばや異文化に通暁しておられる先生方に来ていただくことができた。ユニークな日本文化論で著名なアルゼンチンのラガナ先生、一ダース以上の言語を軽くあやつるインドのダスグプタ先生、元カイロ大学客員教授久山宗彦先生などである。

ゼミでの使用言語は「英語と日本語」だった筈なのに、ギリシア・ラテン・ヘブライ・アラビア・ヒンディー・ベンガリー・タミルなど、ありとあらゆることばや見慣れない文字が黒板を埋めつくすようすはみごとだった。ラガナ、ダスグプタ両先生の御家族や、エジプト・ミクロネシア・東南アジアからの留学生諸君も交えての、文字通り国際交流ができたのもよかったが、ゼミを通じて学生同士、学生と教員、そして教員同士が深いつながりを得ることができたのも幸いであった。

いかにも秋色の濃い多摩の一角で行うにふさわしいゼミを終えて、学生諸君はいま、今回のゼミのまとめや文集づくり、そしてもう第3回目への企画に精をだしている。

頌春……祈りつつ、学びつつ

よりよいセミナーハウスを　より多くの利用者に

これは年頭に私が心に刻んだ標語である。立派な施設ができたのにもかかわらず、ここ二、三年利用者の増加が見られない。先年経済不況のとき、松下幸之助氏は自ら営業部長に降りて、商品を売り歩いたということであるが、誇張ではなく、私も営業部長になった覚悟で、今年は大学や会社を訪問し、利用者層の拡大に努めたい。「哲学なき企業は亡ぶ」というからである。

狙(さる)も来よ桃太郎来よ　草の餅

これは東大教授芳賀徹氏の賀状にかかれていた一茶の句である。そして同教授は「セミナー・ハウスもいよいよ草餅となられますように」との添書きをされて、私を励まして下さった。有難い友情である。私は開館以来今日まで、利用者の皆さんにうまい草餅を食べさせて差しあげようという念願から、ひたすらに番頭の役割を果たすよう努めて来たつもりである。交歓会、新年の集い、花見の茶席、年末の餅つき、盆踊り、遠来荘の雪見の宴、交友館のコーヒーアワーなど、この丘には、にぎやかなもてなしがある。

桃太郎よ、外国人も、社会人も、千人会員のご家族も、新入生もOBも、きじと猿もお伴にして、にぎやかに来てくれ給え。番頭は日曜でも祭日でも待っている。もてなすことはたのしいことだ。

●館長日記から

◈真理の鐘をつく元旦行事

暁闇の多摩の丘で元旦を迎えること十五年。そして開館十五年の年輪を刻んだ。幸わせというものである。「鐘の音が『館長、今年は古稀ですよ』とひびきますね」といってくれた人がいた。一瞬私は冷厳なときを味わった。

今年の鐘つきには岡山専務理事が加わってくれた。それに近くに住んでいる常連の五人の職員達。営繕の浅野さんの声が元気がよい。田島澄江さんの肝入りで交友館にしばし集まり、清酒の杯をあげて新年の挨拶をかわした。八〇年代に精勤しようとする職員達の情念がこうした喜びの中で養われる。

◈思想は高潔に、生活は簡素に

「混迷の八〇年代をどう生きる」という論文がやたらと目についた。正月三日間、新年号雑誌五冊、新聞四紙を読む。我等のモットーこそ古今を通じて誤りない生き方である。そして国家であれ、個人であれ、信義に生きることを忘れてはなるまい。

◈わが家の改築、小さな国際化の試み

留学生を泊める一室を、外国のお客も招きたいので小さな食堂を。私は老齢にして資格なく、娘能子の名儀で住宅金融公庫と厚生年金の融資をうけての年来の夢の実現である。国際セミナー館ができたので、わが家も急に国際化時代に入った。「天の下では何事にも定った季節がある」とは旧約聖書「伝道の書」のことばである。

のドメニコ・ラガナ法大客員教授、インドの社会言語学者コッラン・ダスグプタ同大講師を含む六名。参加学生は、エジプト、ミクロネシア、シンガポール、ホンコンからの留学生五名を含む三五名。それに前記ラガナ氏の夫人と中学生のアントニオ君（卓球でもっぱら国際交流）、ダスグプタ氏の夫人と日本語も達者な小学生のエニカさん、幼稚園のキクちゃん（いずれも日本の公立の学校に入っている）などのご家族五名。極めて多様なグループ構成であるが、終始家族的な一体感と和気に満ちた合宿であった。

本号では、第1・2回を通して同合宿セミナーの推進と指導の中心となられた小西正捷教授（千人会員）を煩わし、この新鮮でユニークな国際交流の一端を紹介していただくことができた。

●キャンパス点描

10月5日＝夕食時の食堂で在泊の五グループを紹介したあと、各グループごとに「十五夜」の月見のダンゴを供した。

10月13日＝職員が仕事の合間に丹精して作ったさつま芋の一部が掘りおこされた。夜9時のお茶の時間には、共同セミナー参加者が交友館前のバーベキュー・コーナーに集って芋の鉄板焼きを、また「ICU学生セミナー」の参加者は当夜のキャンプ・ファイアーで焼芋を、それぞれ楽しんだ。

10月19日＝台風一過の夕食時、在泊の三グループが交流。各グループ代表による合宿内容の紹介があった後、学習院大フランス会部が練習中の劇「トパーズ」（マルセル・パニョル作）の一景を披露してくれた。

10月28日＝第4日曜恒例の「遠来荘茶道教室」に都立大国語研究会、東京理科大建築科の学生計二七名が参加。なお11月25日の同茶道教室にも一五名が参加。

11月4日＝法政大史蹟踏歩会で来館された芥川龍男教授が「八王子・日野・府中・調布・町田史跡散歩」などのご著書を寄贈された。なお同日遠来荘で行われた「郷土の歴史を考える会」には八王子の市民二〇名が参加した。

11月5日＝U研究室・松崎義徳氏の案内で米国聖公会司祭R・M・スミス氏夫妻が当ハウスの施設を見学した。

11月22日＝夕食時に在泊の九グループ二三二名が交歓。各グループ代表による〝一分間ゼミ紹介〟のあと、玉川大土山・米山ゼミの寮生二五名が日頃食事の前後に愛唱しているという合唱曲のうち二曲を披露してくれた。

●利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用

10月＝三、六五二人
11月＝三、六三二人

■10月

東京都立大学教授　二村　敏子
東京工業大学CORAL会　武蔵大学教授　西山　忠範
千葉商科大学講師　平井　克彦
東京大学駒場学生委員会　東京大学教授　坂本　義和
学習院大学講師　川野　重任
法政大学不動産鑑定研究会
順天堂大学病院業務改善セミナー
東京理科大学講師　沖塩荘一郎
東京都立大学助教授　慶谷　壽信
早稲田大学教授　田村　恭
日本女子大学助教授　田端　光美
明治大学教授　山本　恒
武蔵大学教授　横山　定雄
中央大学会計学研究会
東京都立大学教授　小泉　安則
一橋大学教授　良知　力
電気通信大学情報数理工学科
国際基督教大学講師　加山　久夫
東京都立大学教授　速水裕次郎
東京都立大学助手　田村　俊和
東京大学自然科学研究会
東京大学哲学研究会
学習院大学フランス会部　川路　紳治
学習院大学教授
東京農業大学教授　岩崎代志治
慶応義塾大学講師　今田　好彦
東京工業大学教授　武者　利光
東海大学教授　師岡　孝次
東京外国語大学教授　中嶋　嶺雄
中央大学教授　五井　一雄
工学院大学教授　波多江健郎
東京工業大学教授　松田　武彦
東京都立大学助教授　石井　昭
駒澤大学ドイツ語研究会
東京理科大学助教授　堀川　勉
明治学院大学教授　小野　哲郎
上智大学教授　川田　侃
東京理科大学教授　近藤　保
成蹊大学助教授　前沢　三郎
東京都立大学教授　大島　一郎
専修大学講師　刀根　武晴
日本女子大学教授　岡本　栄一
国士館大学教授　木内　俊明
和光大学教授　石原　静子
産業能率短期大教授　深井　秀夫
第17回関東甲信越地区国立学校等係長研修会
富田研究会
第104回大学共同セミナー
経営学研究会

CIP化合物研究会
哺乳類研究グループ
法政大学教員研究会
東京YMCA英語学校
国際TM協会
日本基督教団芝教会
日本教会成長研究会
公立保育園研究会
東芝電子事業部＊
東京商工会議所
八王子大丸労働組合
日電バリアン
日本損害保険協会
京王プラザ京友会
京王プラザホテル＊＊＊＊
千代田運輸
明治屋
京王百貨店
酒類食品流通研究所
東京税理士会葛飾支部
日野協力会
小西六写真工業
小西六写真工業労働組合
東京コカ・コーラボトリング労働組合
ソフトウェアマネジメント
新東京日産自動車販売

【個人利用】
工学院大学学生　米山　哲夫
上智大学学生　町野いこひ
成城大学学生　森　薫子
多摩中央信用金庫＊　島田　好典
工学院大学助教授＊　今井　義夫
東大社会科学研究所　仁田　道夫

【日帰り利用】
世田谷区立松沢中学校月見の会
萬緑城西俳句会
慶応義塾大学時事英語研究会

■11月
立教大学教授　土方文一郎
中央大学会計学研究会
学習院大学教授　辻　邦生
早稲田大学教授　清水　望
中央大学教授　丸尾　直美
青山学院大学助教授　関田　寛雄
立教大学院生会
東京大学国際保健研究会
立教大学教授　淡路　剛久
明治学院大学教授　高野　史郎
法政大学国際交流合宿セミナー
中央大学心理科学研究会
東京外語大講師　野村タチアーナ
明治大学教授　田村　光三
法政大学史蹟踏歩会
東京大学金躍ゼミナール
早稲田大学講師　奥平　康弘
芝浦工業大学教授＊＊　十代田知三
立教大学助教授　粟屋憲太郎
早稲田大学吉阪研究室
千葉商科大学教授　小竹　豊治
一橋大学消費生協常務理事会
中央大学教授　R・E・フリーマン
東京薬科大学教授　須賀　哲也
立教大学教授　松井　賚夫
東京大学刑法学習会
東京農工大学助教授　鈴木　健之
東京都立大学助教授　国井　隆弘
東京都立大学民法研究会
明治大学教授　松瀬　貢規
中央大学教授　松本　正徳
中央大学通信教育部神奈川支部
工学院大学講師　南迫　哲也
早稲田大学理工学部生産管理ゼミ
東京都立大学遺伝学ゼミナール
工学院大学金属水素化物研究会
東京都立大学教授　倉沢　進
東京都立大学教授　山崎　康男
東京都立大学教授　飛田　満彦
青山学院大学教授　佐藤　信
慶応義塾大学教授　有賀　一郎
慶応義塾大学助教授　関根　智明
東海大学建築研究会
早稲田大学教授　安東　勝男
東京都立大学助教授　山住　正己
鶴見大学教授　井村　君江
駒澤大学教授　斎藤　寿
専修大学「樹々の会」　持木　幸一
東京大学助手
一橋大学日本の地理編集委員会
上智大学カウンセリング研究所
慶応義塾大学日本文化研究会
東京都立大学生物学ゼミナール
明治学院大学教授　宮野　彬
神奈川大学教授　加藤　一昶
武蔵工業大学教授　広瀬　鎌二
早稲田大学教授　鈴木　慎一
成蹊大学助教授　深谷　昌弘
工学院大学教授　中島　康孝
上智短期大学講師　羽場　勝子
南山大学自動車部
横浜商科大学講師　平野　文彦
玉川大学教授　土山　牧民
フェリス女学院大学教授　小塩トシコ
国士館大学助教授　水野　武機
日本女子大学附属高等学校
現象学・解釈学研究会
第3回日豪合同セミナー
第105回大学共同セミナー
日本油化学協会
日本生活学会
放電研究グループ
地域構造研究会
国際TM協会＊
日本キリスト教会東京中会青年部
久遠キリスト教会
品川教会附属品川地域センター
日本ボーイスカウト東京連盟杉並地区
日本精神科看護技術協会
東京地方簡易保険局
ジェイ・エム・アール東京
京王百貨店
山村硝子東京工場＊
東芝電子事業部
ウエラ化粧品
松下電器労働組合産東支部
中村呈
全国農業協同組合中央会
八王子大丸労働組合
新東京日産自動車販売
郵政省簡易保険局
日本電気＊

【個人利用】
明星大学学生　鈴木　剛
産業能率大学助教授　山田　善靖
東京ガス不動産　米山　哲夫
東京薬科大学教授　河野　恵
小南建築設計事務所　奥野　光治
成城大学学生　森　薫子
東京外国語大学学生　吉武　幸治
津田塾大学教授　馬場　伸也

【日帰り利用】
日電バリアン
郷土の歴史を考える会
沖電気工業
工学院大学専門学校
㈱三和

▼第108回大学共同セミナー

主題　イスラムの世界―その文明の現代的意義―
期日　昭和55年3月12～14日
＜全体講義＞
I　世界史におけるイスラム（三木亘氏）／II　イスラームの理念と現実（黒田壽郎氏）
＜セクション演習＞
A言語と文化（池田修氏）／Bイスラム教の世界観（中村廣治郎氏）／Cイスラーム教徒の生活と文化（片倉もとこ氏）／Dイスラムの社会史（佐藤次高氏）／E国際関係と経済・社会開発（中岡三益氏、藤田進氏）／F民族と国家（板垣雄三氏）
＜参加資格＞学生、および社会人若干名

▼第7回国際学生セミナー

主題　文化接触と日本―〝相互依存〟のなかで―
期日　昭和55年3月17～19日
＜全体講義＞
日本人の日本知らず（ピーター・ミルワード氏）
＜セクション演習＞
A東アジアと日本の近代化（平野健一郎氏）／B東南アジアの価値体系と日本的価値観（菊地靖氏）／Cアラブと日本人の距離（片倉もとこ氏）／Dラテン・アメリカと日本（中川文雄氏）／E日豪関係の新時代（広野良吉氏）
＜参加資格＞日本人学生、留学生

●編集後記

本号は、新年号らしい内容をもった紙面に、というのが編集会議の結論でした。ことに今年は開館十五年という記念すべき年でもあり、いまのセミナー・ハウスには確かな座標が期待されているむきもあるので、縁の深い方々から率直なご意見をお寄せいただくことにしました。

図らずも元服するセミナー・ハウスに対する祝言のようなものになりました。ご寄稿下さった方々の温かいご協力に厚く感謝いたします。

（飯田能子）

セミナー・ハウス　第65号
編集人　飯田　宗一郎
発行人　岡　山　猛
製作　中央公論事業出版